

# 「怖い思い」が生むもの

「痛くない死に方」に主演 柄本佑

二つの顔を巧みに演じ分けた。前半は、亡くなった患者を前にしても心ここにあらずの冷たい医者。後半は、患者と向き合い心を通わせる快活な医者。「演技の決めごとはずくらず、高橋伴明監督のホン(脚本)に身をゆだねただけです」と言うが、観客は同一人物と思えぬ変身ぶりに驚かされるはずだ。

この医者にはモデルがある。「自宅で最期を迎えたい」という願いを持つ約2500人をみとってきた在宅医療の専門家・長尾和宏だ。今作の原作の執筆者でもある。撮影前には往診に同行し、患者との向き合い方を学んだ。そして、長尾と同じ「普段着姿」を役に取り入れた。「白衣や医療用カバンは患者にとって異物であると言われていました。異物が自宅に入ってくるだけで、患者は緊張する」と。前半は着ていた白衣を後半では脱ぎ、「高低差」をつけることは意識しました」

ある患者の死を機に心を入れ替え、普段着の町医者になった主人公の河田は在宅医のあり方を模索し、末期がん患者の本多(宇崎竜童)に寄り添うことになる。2人の心の交流がゆったりと描かれ、感動が生まれる物語だ。「映画ならではのいたく時間流れる作品。さすが伴明さんですよ」。俳優きつての映画通は、高橋監督の話題になると途端に生き生きとしてくる。正式なオファー前から「どんな役でもいいから、やりたい」と出演に前のめりだったという。「いち映画ファンとして、聞きたいことがあるし、監督する姿を見たい。単なるミーハー心です(笑)」

ドラマに映画へと出演作が相次ぐ人気俳優だが、映画界をリードしてきた監督や俳優との協働が「仕事選びの基準」だそう。「岸部一徳さんや石橋蓮司さんと一緒にできるかということに尽きます。ワンシーンでも、いいんです」と言い切る。「それは今のうちに怖い思いをしておきたいから。憧れの監督や俳優との仕事には喜びと同時に恐怖もある。でも、その怖さがないと何も生まれない」。今作では奥田瑛二や大谷直子ら名だたる名優と共演した。「この映画の良さは、そんな緊張感から生まれているのかも、ですね」

(文・小峰健二 写真・村上健)



えもと・たすく 1986年、東京都生まれ。2003年の主演作「美しい夏キリシマ」でデビュー。「きみの鳥はうたえる」などでキネマ旬報ベスト・テン主演男優賞。近作に「心の傷を癒すということ」。「痛くない死に方」は20日から順次公開。

見る